

法然浄土教における諸行往生論争

市川 定敬

問題の所在

いかに申すともこの世の人の極樂に生まれて生死を離れん事、念仏ならで極樂に生まるる事はさうろうまじき事にてさうろうなり。
〔津戸三郎へ遣わす御返事〕〔浄土宗聖典〕四、四一九頁

余行の者はふつと生まれずというにあらず。善導も「廻向して生まるべしといえども諸の疎雜の行と名づく」とこそは仰せられたれ。
〔要義問答〕〔浄土宗聖典〕四、三八二頁

法然遺文の中には、一見して諸行往生の可能性を全く認めないものと、そうではないものの両者が見られる。これらの説示を前にして、我々は法然の立場をいかに理解すべきであろうか。

法然における諸行往生の可否という課題は少々厄介である。その理由は第一に、法然門下で解釈が分かれることからしても微妙で困難な問題であること、第二に、法然思想評価の全体に波及する重大な問題であることである。

(本庄二〇二a、二九七頁)

諸行往生論争のただ中で本庄良文氏はこの問題の重要性を右のように指摘している。

発端は、平雅行氏による「選択本願念仏説」を根拠とする諸行往生不可説の提唱にある。詳細は後述するが、平氏は選択本願念仏説をそれ以前の念仏説に対して諸行往生を完全否定するものであることにより、法然を思想上の画期と位置づける(平一九九二)。この平説に対して松本史朗氏は、選択本願念仏説は念仏が本願として選ばれたことを意味するが、それがそのまま諸行による往生の否定を意味するものではないと反論。論拠として、『選択集』第十一章には、「念仏する者は、命を捨てて已後決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり」と明言されている点、また同十二章には諸行往生を認める文言が複数見られるといったことが挙げられる(松本二〇〇一)。そしてこの松本氏の論文が刊行される前に法然は諸行往生を否定したとする論文(安達一九九六)を成稿していた安達俊英氏は、改めて松本氏への反論を提示する(安達二〇〇一)。すなわち、『選択集』第二章に展開される五番相対の中の廻向不廻向対および、第十一章の「余行は不定なり」については法然が諸行往生を認めていた可能性を否定することはできないが、第二章私釈段に記される「千中無一の雑修雜行」の表現、および第四、第十二章に展開される「廢立」において、法然の原則的立場は諸行往生の完全否定であると主張する。これらに加え平氏が注の中で論じている『選択集』第十三章の解釈を加えて、ここに法然が諸行往生を完全否定したとする平氏、安達氏の論が出揃うことになる。本稿では論点を次の四つとして抽出する。⁴

◆ 選択本願念仏説

◆ 廃立（随自・随他）

◆ 千中無一の雑修雑行

◆ 「生ずることを得べからず」と「生じ難し」

これらの諸行往生否定の論点に対して先に触れたところの松本氏、そして本庄氏と森新之介氏が反論するというのが、法然が諸行往生を認めていたのか否かを巡る論争の基本的な構図である。特に本庄氏はこの一連の論争において二〇一〇年からの十年に亘り九本の論文を発表している。もちろん、法然は諸行往生の可能性を認めたとするこれらの論者も、決して法然が諸行往生を勧めたと主張するものではない。法然はあくまでも念仏往生を勧めているのであるが、その教義上、諸行往生の可能性は認められるかどうかということが論点であるということはここに強調しておきたい。⁵⁾ 本稿では、抽出した諸行往生否定の論点に対する反論を見ていく。

◆ 選択本願念仏説

『選択集』第二章

第十八の念仏往生の願とは、彼の諸仏の土の中において、あるいは布施を以て往生の行とするの土有り。あるいは持戒を以て往生の行とするの土有り。〔略〕すなわち今は前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選択して専称仏号を選択す。故に選択と云うなり。

（浄土宗）一一七頁。

法然が弘通した念仏の特異性を示す表現が「選択本願念仏」であるということは、論を俟たない。しかし、この選択本願念仏をどのように規定するかという点が問題となる。

平雅行氏は、

私見によれば、『観経疏』の本願念仏説とは「称名は弥陀の本願故、称名念仏だけで往生できる」というものであり、選択本願念仏説とは「称名は弥陀が選択した唯一の往生業なるが故に、称名念仏以外では往生できない」と主張するものである。つまり法然は諸行往生を否定した上での念仏専修を主張した。

(平一九九二、四八頁)

と、法然の選択本願念仏説は諸行往生否定を本質とするものとし、これを基点として法然を論じている。この平氏の選択本願念仏説理解に対して、松本氏は次のように批判する。

第一に、『選択集』には、念仏以外の諸行による往生の可能性を認める記述が多数存在する。第二に、『選択集』に説かれる「廃立」義は、一見すると、諸行によっては往生できないという解釈を認める根拠となるようにも思われるが、私見によれば、「廃立」とは阿弥陀仏が諸行を捨て、念仏一行を本願として取ったという「選択」以外のことを意味しない。従って、諸行を廃するとは諸行を本願としなかったという意味にしかすぎず、ここから帰結するのは「諸行非本願」説、つまり、諸行は本願の行ではないという説であって、「諸行不往生」説、つまり、諸行によっては往生できないという説ではないのである。

念仏が阿弥陀仏によって選択された行であるということが、そのまま念仏以外では往生は不可能であるということの意味する訳ではないとして、平氏の選択本願念仏説理解の問題を指摘している。⁽⁶⁾

また、諸行往生否定の立場に立つ安達氏は、法然が選択を説明する際に「選捨」を強調している点を指摘し、松本氏に対して反論する。すなわち、「選択」とはAを「選取」するのみならず、非Aを「選捨」するという誠に厳しい選び取り」であり、「例えば第三願を例に取るならば、極楽は純金色であり、それ以外のあり方は絶対ありえない」、したがって『選択集』第三章における第十八願の説示は、「念仏以外の一行、もしくは念仏以外の多行を往生行とするというあり方が「選捨」された（更に言えば完全否定された）わけである」というのである。⁽⁷⁾（安達二〇〇一、二二二頁）

本庄氏（二〇二二a）は、平氏と安達氏が「前提と結論とを混同している」ことが問題であると指摘する。諸行往生の可否を論じるためには、諸行往生否定論者が前提とする「選択本願念仏」という概念自体の中に諸行往生の可否を求めるべきではなく、次のような発問が必要であるという。

法然によれば、阿弥陀仏（法蔵菩薩）は、第十八願の中で、往生行として称名念仏だけを選取してそれ以外の一切の行を選捨したが、法然は、それにもかかわらず、念仏以外の諸行による往生の可能性を認めていたか否か

（本庄二〇二二a、三〇八頁）

（松本二〇〇一、一六頁）

要するに問われねばならないことは、法然が説き示すところの「阿弥陀仏による選擇」がただちに法然思想の全体系における諸行往生の否定を意味するものであるのか否かということである。選擇本願念仏説を根柢として、法然は諸行往生を否定したと主張する時、その前提にはまだ問われるべき問題が含まれたままだといっているのである。さて、松本論文は平氏に対して

「念仏以外では往生できない」ということを、法然は一体どの著作でどのように説いたのであろうか。平氏は、その論文中のどこにも、この点を示されていないように思われる。

(松本二〇〇一、二頁)

と指摘しているが、以下に見ていく諸行往生否定の三つの論点は、平氏が示さなかったところの具体的論拠として位置づけられるであろう。

◆ 廢立(随自・随他)

『選択集』第四章

謂く諸行は廢の為に説き、念仏は立の為に説く。

(浄土宗) 一二八頁

『選択集』第十二章

上來定散兩門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、意衆生をして一向に専ら阿弥陀仏の名を称せしむるに在り。

(浄土宗) 一六五頁 『観経疏』散善義(『浄土』二卷七一頁下)

『選択集』第四章と第十二章は共通して廃立を説く。第四章は、『無量寿経』三輩段に往生人の行として念仏以外の行が説かれている理由について廃立、助正、傍正の三義が説明され、「殿最知り難し」としながらも「今もし善導に依らば、初めを以て正と為すのみ」、つまり廃立義こそが最要であると説く。第十二章は、『観経』において釈尊が定善散善の諸行の利益を説いたにも関わらず、最終的にはそれらを阿難に付属せず、ただ念仏のみを託したことが論じられる章であり、「定散は廢の爲にしかも説き、念仏三昧は立せんが爲にしかも説く」とする。

特に第十二章で定善と散善の各項目について説明がなされる中、定善十三観の一つないしは複数により「往生を得べし」と記し、散善においても孝養（父母）奉持（師長）、四無量心、十善業、菩提心、深信因果、また諸々の大乘經典の読誦に対して「往生の業とす」と記されており、あたかも諸行往生を明らかに認めているように捉えられる。

この点について安達氏（一九九六）は、第十二章が引用する『観経疏』の文「上来定散両門の益を説くといえども、仏の本願に望むれば、意衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」に注目して、「上来説くところの定散両門の益」は否定されるべき方向で理解すべきである」という。第十二章後半部は、定散に対比して念仏が論じられる箇所であるが、ここでは念仏が本願の行である故、阿難に付属され、帰せしめられ、時機相応であり、釈尊の随自（自発的に説かれたもの）であって、対する諸行は非本願である故、付属せず、廢され、時機不相応であり、随他（他者の意によって説かれたもの）であることを説いている。このうち特に諸行が廢されていることと随他であり随自の後には「閉じられている」ことから、また第四章の廢立義を傍証として、これらは諸行往生の「完全否定の価値づけ」であるとする。

また、善裕昭氏はこの十二章において諸行往生を認める表現が見られることについて、

法然は『観経』自体にはそうあるといいながら最後は善導の『観経』理解にのっとって、念仏ニ積尊の随自意、諸行ニ随他意と結論していく。部分的にみれば否定かどうか黒白はつきり線を引きにくい点は確かにあるが、全体の論旨では弥陀・釈迦・六方諸仏の意思に照らして念仏と諸行の価値批判がなされるのであり、そのことの意味が何であるかを問わなければならない。

この問題はまだ尾を引くだろうが、少なくとも筆者は、弾圧問題や『摧邪輪』の反応なども含め考えると、法然は非本願たる諸行それ自体に往生行としての価値を認めていないと考える。

(善二〇〇一、一五二～一五三頁)

と諸行往生に対して否定的に論じている。

これらの論に対する森氏と本庄氏の反論を見ていこう。

森氏は第十二章の私積段に記される

然るに今『観経』の流通分に至って、釈迦如来、阿難に告命して往生の要法を付属し流通せしむるに因って、観仏の法を嫌って、なお阿難に付属せず、念仏の法を選んで、すなわち以て阿難に付属す。(略)然るに世人も観仏等を楽しんで、念仏を修せざるは、これ遠くは弥陀の本願に乖くのみならず。またこれ近くは積尊の付属に違す。行者宜しく商量すべし。

(『選択集』〈浄土宗〉一七三頁)

の説示を取り上げ、

ここで源空は、観想念仏などは弥陀が本願とせず釈迦が付嘱しなかった行であると位置付け、これらを修すならば遠くは弥陀の本願に背き近くは釈迦の付属に違うとする。しかしながら、だからと言ってこれらによる往生が不可能または劣等だとは述べようとしない。念仏を専修しない者は仏弟子でないなどと脅迫することすらなく、ただ是非ともよく推して考えよと行者に判断を委ねるのみであった。

(森二〇一〇、六二頁)

次に本庄氏による反論であるが、まず安達氏の理解に対しては「廃立」の語意について詳述する。善氏の前掲とは別の研究(善一九九二)に基づいて、廃立が天台教学に由来し、「廃」が完全否定を意味するのではないことを指摘する。すなわち天台宗で用いられる「廃権立実」は、釈尊が『法華経』に至りそれ以前の仮の教えを捨て真実の教えを提示したことを意味する。また「廃迹立本」は、釈尊が菩提樹下にて成道した仮の姿を否定し、本来の久遠実成の姿を提示することを意味する。これらの用例では廃されるところの仮なるものが完全否定されていないことが指摘される。さらに本庄氏は玄奘訳『俱舍論』や源信『往生要集』では「廃立」が価値判断ではなく「ある概念に入れるか入れないか」の表現として用いられている事例を挙げる(本庄二〇一〇a)。これら二点の指摘により、安達氏の「完全否定の価値づけ」という捉え方を批判する。

次に善氏の見解に対しては、「法然にとつて、釈迦が諸行往生の門を永遠に閉じたことが諸行往生の完全否定を意味するとすれば、法然は釈迦による『観経』説示以降の諸行往生を一例も承認しなかったはずである」として、『逆修説法』に『観経』説示後の余行による往生が五例言及されていることを示す。

- ① 二七日。大安寺勝行上人。真言の五輪観によって現身往生。
〔昭法全〕二三九頁
- ② 二七日。唐土の明曠。日想観から普往生観によって往生。
〔昭法全〕二四〇頁
- ③ 二七日。唐土の常敏。『大般若』を書写して往生。
〔昭法全〕二四一頁
- ④ 二七日。房翥。念仏を勧進して往生。
〔昭法全〕二四一頁
- ⑤ 四七日。沙弥道衍。奉事師長にて往生。
〔昭法全〕二六〇頁

つまり、『選択集』第十二章は定散の諸行は随他の教えとして閉じられたと記されているが、それがそのまま諸行往生の完全否定を意味するわけではないとする。(本庄 二〇一四c)

◆千中無一の雑修雑行

『選択集』第二章

あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行を執せんや。

(浄土宗) 一一三頁)

『選択集』第二章では、往生の行として五種正行、すなわち正定業としての口称念仏と前三後一の助業の内容が説かれる。そしてこれら五種正行とそれ以外の行である雑行の比較がなされ、雑行を捨てて専修念仏すべきと括られる。

安達氏はこの第二章について、まず前三後一の助業が「念仏では不十分故にそれを補助するという意味での助業

ではなく、あくまで人をして専修念仏の行者たらしめることを助けるといふ意味での助業である」と助業が往生の直接的原因となるものではないことを確認する。そして同章、後半部分に説かれる正行と雑行の比較において、引用段が善導の『往生礼讃』から「もし能く上のごとく念念相続して、畢命を期とする者は、十はすなわち十生じ、百はすなわち百生ず。(略)もし専を捨て、雑業を修せんと欲する者は、百時希に一二を得、千時希に五三を得」、「ただ意を専らにして、作さしむる者は、十はすなわち十生ず。雑を修して至心ならざる者は、千の中に一も無し」を引きながら、私積段では「あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行を執せんや」と雑修の者の往生は「千時希に五三」ではなく「千中無一」であることのみ言及している点に着目し、これが法然の立場であり、つまり諸行往生を認めるものではないと論じている。

森氏の批判から見えていこう。森氏(森二〇一〇)は『選択集』第一章の引用段で、『安楽集』が『大集経』を引き、「我が末法の時の中に億億の衆生行を起こし道を修せんに未だ一人も得る者有らじ」としている点に着目する。そしてこの「億億」は十の十六乗であるため京中無一ということになり、不可能の意味合いが限りなく強い」として、第二章の私積段がこれを採用していないことを

「千中無一」とは、諸行往生が困難かつ不確定であることを「百時希得^{二二二}、千時希得^{三三三}」よりも強調した表現ではあるが、道綽の京中無一と異なり、不可能を主張するものでないと見るべきであろう。

と論じ、法然が聖道門証悟と同様に諸行往生も完全否定していたわけではないとする。

本庄氏(二〇一二b)は、まず『選択集』は「教義書」、消息類は「布教関連の文書」という安達氏(一九九六)

の位置づけを問題視して、『選択集』は「理論書、教義書であるとともに布教の書、実践の書である側面をも併せ持っている」ことを指摘した上で、「法然にとっては「千時希得五三」が諸行往生の可能性を示す善導の理論的結論であり、「千中無二」は、たまたま善導が見聞した諸行往生の実態を表現する言葉」であり、「両者の齟齬は、理論と実際との齟齬で説明できる」としている。さらに『逆修説法』六七日で『選択集』同様に専修正行と雑修の對比として『往生礼讃』が用いられる箇所において、法然が「前の義を以て判じ候には、千が中に五三と許し給へり（『昭法全』二七三頁）」と論じている点に着目し、この「許す」は、「理論的に」承認する」「（宗義・教義として）認める」の意味であることを法然遺文および玄奘訳の『瑜伽師地論』『俱舍論本頌』の用例を上げて論証している。⁽⁹⁾したがって、「偏依善導一師」を標榜する法然においても理論上諸行往生不可ではなく「千中五三」であり、実際上の「千中無二」を『選択集』の私釈段が採用しているのは、「専修念仏を勧奨し、「諸行往生はあきらめよ」と抑止する」意図によるものであると論じる。

◆「生ずることを得べからず」と「生じ難し」

『選択集』第十三章

「少善根福德の因縁を以て、彼の国に生ずることを得べからず」とは、諸余の雑行は、彼の国に生じ難し。

（浄土宗）一七六頁

先に、平氏は法然が念仏以外では往生できないと説いている箇所を挙げていないという松本氏による指摘に触れたが、『選択集』第十三章で取りあげられる『阿弥陀経』の文言は、平氏が法然の文言に沿って諸行往生否定を主

張する数少ない箇所と言える。少々解りにくい説明であるのでそのまま挙げよう。

すなわち本章は、「少善根」では往生できないという『阿弥陀経』の一文を釈したものである。そして法然は『観経疏』¹⁰を根拠にして、この「少善根」が雑行を指すと解している。つまり法然はここで、雑行が一般的に「少善根」であると語っているのではなく、あくまで『阿弥陀経』の文意における「少善根」であると主張しているのである。つまり『阿弥陀経』が非往生行を「少善根」と呼んだのを承けて、法然が雑行を「少善根」（非往生行）と語ったに過ぎない。「諸余雑行者、難生彼国」とあるように、本章のモチーフは他章と同様、雑行が非往生行であることを論証することにある。それ故、本章での「少善根」と「多善根」とは、善根としての価値の大小を表現しているのではなく、非往生行と往生行との絶対的格差を表現しているのである。

（平一九九二、二二一頁）

ここで平氏は「法然が雑行を「少善根」（非往生行）と語った」としている。しかし、私釈段で法然は「不可得生」ではなく「難生」としていることに留意する必要がある。

さて、安達氏（二〇〇二）はこの『選択集』当該箇所について、『阿弥陀経』が言及するのは「少善根」だけであるので、それが雑善であることを論証するために善導の「随縁の雑善は恐らくは生じ難し」を引用し、そして、

「恐難生」という善導の文言にひかれて、法然も「難生彼国」と述べただけと考えたほうが良いのではなからうか。実際、『逆修説法』では『選択集』と同じような文脈で、「修彼少善根余行、不可得往生」（『昭法全』二

三七頁)、即ち少善根たる余行では往生不可と述べている

(安達二〇〇一、一一七頁)

と論じる。

これらの主張に対する本庄氏(二〇一b)の反論であるが、まず平氏に対しては『阿弥陀経』の「不可得生」に対する法然の「難生」という解釈について、「不可」と「難」の違いが完全に無視されている点が指摘される。つまり、『阿弥陀経』が「不可」として余行による往生を完全否定しているのに対して、法然は「難」として可能性は皆無ではないと解釈しているということである。

ここにおいて諸行往生可否の問題のみに留まらない重要な指摘が本庄氏によってなされる。すなわち、善導や法然がインド仏教以来の経典解釈法に則った上で、经文の「不可」を「難」としているという点である。本庄氏は別の論文(本庄二〇一〇)で

宗義に基く、あるいは宗義を立てるための聖典解釈においては、佛説の表面的な文言よりも、解釈者の解釈が優先される

という部派仏教以来の原則を提示している。例えば、『無量寿経』では五逆罪と誹謗正法の者は往生できないと説かれるが、『観無量寿経』では五逆の者の往生が説かれる¹⁾。このような矛盾する経説(＝仏説)に対して、それは矛盾ではないと会通する「論」が重要視されるということである。さもなくば、仏は矛盾する言葉を説いたか、もしくは虚偽を説いたことになってしまふからである。そして、どの論に依るかにより学派が形成されてきたのが仏

教の歴史だといっているのである。

かくして『阿弥陀経』の「不可得生」を『選択集』が「難生」とするのは、善導の『法事讃』に依拠するものであるが、この解釈法は部派仏教以来の伝統を踏まえたものであり、さらに言えば、『阿弥陀経』の「不可得往生」をそのまま往生ができないと解釈するのではなく、「生ずることは難しい」と理解する立場こそが法然の立場、すなわち浄土宗の立場であるということがいえるとする。

次に、『逆修説法』が「不可得往生」としているところを『選択集』が「難生」とするのは、「善導の文言にひかれて、法然も「難生彼国」と述べただけ」とする安達氏の見解に対しては、法然の善導に対する態度としては妥当ではないと本庄氏は反論する。『選択集』において「偏依善導一師」が表明されており、また他の法然遺文や伝記類からも、法然が善導の文言を用いるに当たり「ひかれて述べただけ」といった理解は「いかにも軽い善導評価」であり相応しくないという指摘である。¹³⁾ 法然は善導を弥陀の化身としているということもここに付け加えてよいだろう。

さらに『逆修説法』で「不可得生」と説かれていることについては、これまでの法然研究から『逆修説法』を資料として『選択集』が成立したことが明らかにできており、これに基づけば『逆修説法』の「不可得往生」が不適切であったので、『選択集』では「難生」と修正されたと考えざるべきであると指摘する。

また、インド以来の仏教の伝統において「不可」の語意を「難」と解釈する根拠を提示し、善導と法然が「不可得生」を「難生」と解釈することの妥当性を論証している。¹⁴⁾

結びにかえて

以上、法然は諸行往生を完全否定したとする主張の論点を挙げ、それらに対する反論を見てきた。選択本願念仏説は諸行往生を否定するものであるとする平氏の「私見」は、それを論証すべく挙げられた三つの論拠のいずれもが会通・反論の可能なものであった。第一の「廃立」は、語義そのものにおいて価値判断のみを意味するものではなく、また随自に説かれた念仏の後、随他の諸行が積尊によって永久に閉じられたといっても、積尊滅後の中国において諸行往生の例を法然は見出しており、随他として閉じられたことがそのまま諸行往生が不可能であると位置づけられるわけでもなかった。第二の、法然は雑修雑行を「千中無一」とする点については、その根拠となる善導の文は、理論上「千時希得五三」でありながら事実上の「千中無一」であると読むべき文脈であり、法然は往生が確実である専修念仏を強く勧奨するために「千中無一」を用いたと解釈できる。そして第三の点については、『阿彌陀經』が少善根では「生ずることを得べからず」と説いているのを、法然が「生じ難し」と読んでいるのである。法然の立場について論じるのであれば「生じ難し」をその立場とすると判断するのが自然であろう。そして、法然が『阿彌陀經』の文言を文字通りには受け取っていないことは、經典解釈の伝統に基づく必然なのである。

さて、最後に本稿でこれまでに触れられていない、『選択集』が諸行往生の可能性を認めていると理解せざるを得ない文言について見ておきたい。

諸行往生は、近く末法万年の時に局れり。念仏往生は、遠く法滅百歳の代を霑す。
 (浄土宗) 一三四頁)

末法の時代の一万年間は、諸行往生が認められると消極的ながらも明言されている文である。『選択集』第六章は、末法一万年の後に余行は消滅するが、念仏だけは法滅の時であっても百年間留められることが説かれる章である。この章では①聖道門と浄土門、②十方浄土と西方浄土、③兜率天と西方浄土、④念仏往生と諸行諸行往生、それぞれの住滅の前後が論じられる。諸行往生を否定する平氏は①を取りあげ、末法万年の「教道滅尽」に至って聖道門得道が完全に不可能になると法然が理解していたとし、これを法然が現下における聖道門得道を否定していない証左としている(平一九九二、一六七頁)。本庄氏はこの平氏の論を契機として、この末法の間は諸行往生が可能と明言する文にたどり着くことができたと述べている。(本庄二〇一四a)

さらにこれまでの論争において触れられていない、第十一章の次の説示も挙げるができるであろう。

また道綽禪師、念仏の一行において、始終の両益を立つ。『安樂集』に云く、「念仏の衆生は撰取して捨てたまず、寿尽きて必ず生ず。これを始益と名づく。終益と言うは、『観音授記経』に依るに、云く阿弥陀仏の住世長久、兆載永劫にして、また滅度したまふこと有り。般涅槃の時、ただ観音勢至有つて安樂を住持して十方を接引す。その仏の滅度また住世の時節と等同なり。然るに彼の国の衆生、一切仏を覩見する者有ること無し。ただ一向に専ら阿弥陀仏を念じて往生する者のみ有つて、常に阿弥陀仏現在して、滅したまわざるを見る。これはすなわちこれその終益なり」。

上 巳 まさに知るべし。念仏はかくのごとき等の、現当二世始終の両益有り。

『安樂集』からの引用であるが、極楽において阿弥陀仏が涅槃に入っても、専修念仏で往生した者だけは目の当たりに阿弥陀仏を見ることができるといふ念仏の利益が説かれる。これも諸行往生の者も在り得るといふ前提がなければ利益として成立しない。『安樂集』に説かれるところではあるが、「念仏はかくのごとき等の現当三世始終の両益有り」は法然自身の言葉であり、この『安樂集』の立場、すなわち諸行往生も在り得るといふことをそのまま認めていたと見てよいであろう。

今、浄土宗開宗八五〇年という節目を機会として、諸行往生論争を振り返って見るに、法然が念仏以外による往生を一切認めなかったという見解は、法然をして善導の『観経疏』「一心専念」の文に救いを見出し浄土宗開宗に至らしめた三学非器という問題意識、およびその開宗の意趣として語られた「勝他のためには非ず」という立場とは大きく趣の異なるものであるといふことに考え至るのである。¹⁶⁾ 仏教の通規である三学を實踐し得ないと嘆く者が、諸行に理論上の価値もなしと判断を下し得るだろうか。理論上は往生可能にも関わらず、自身は口称念仏でしか往生できない存在であるとする人間洞察こそが、法然浄土教の真骨頂であるといえるのではなからうか。¹⁷⁾

法然は理論上諸行往生を認めていたとする主張に対する反論は、安達二〇〇一年論文以降二〇二三年現在に至るまで発表されていない。

註

(1) 『選択集』(浄土宗) 一六四頁。

- (2) 松本論文(二〇〇一、四七五頁〔初出は一九九九年〕)は、「回向とは、雑行を修する者は必ず回向を用うる時、往生の因と成る」(『選択集』〔浄土宗〕一〇九頁)の文を挙げて、『選択集』に、雑行を廻向することによって往生できる^レという立場が説かれていることは、明らかである」と論じている。
- (3) 松本論文(二〇〇一、一七頁)に「また念仏する者は、命を捨てて已後決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり」(『選択集』〔浄土宗〕二六四頁)を挙げる。
- (4) 本庄氏はすでにこの論争の概略を繰り返しまとめられている(本庄二〇二二a、二〇二〇)。それらにおいて本庄氏は諸行往生否定派の論点を、①「千中無一」という表現、②「選択本願念仏説」、③「廢(立)」という価値づけ、④「諸行往生の門が永遠に閉じられる」こと、⑤「不可以少善根福德因縁得生彼国」の経句、の五つでもって抽出しているが、③と④は『選択集』第十二章に関わることとして、本稿では「廢立(随自・随他)」として一つにまとめている。
- (5) 法然における諸行往生に関わる論攷として、『曾根 二〇〇二』と『結城 二〇一七』も挙げられる。この二論文は法然の「宗教的実存の立場」(曾根)「宗教的確信」(結城)を重視するものである。法然浄土教を理解する上でこれらは極めて重要であるが、今問題となるのはこうした立場や確信の大地ともいべき部分である。
- (6) 本庄氏は松本氏と同じく諸行往生の可能性を認める立場であるが、「廢立」と「選択本願」は同義ではないことを「本庄二〇二二a」において論じている。
- (7) ただし安達氏は同論文の中で、平氏が諸行往生の否定を選択本願念仏説の本質と見ることに対して、それは「あくまで二次的な問題」であり、
- もし、本当に諸行往生の否定を本質としているならば、少なくとも選択本願念仏を説く『選択集』においては、諸行往生の否定が明言されたであろうし、逆に、諸行往生を認めているかの如き曖昧な表現は厳しくチェックされ、削除されていたことであろう。ところが実際はそうはなっていない。
- とも述べており、この安達氏の曖昧な姿勢も、本庄論文「二〇二二a」は批判している。

(8) 余このごろ自ら諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして専雜異なり有り。ただ意を専らにして、作さしむる者は、十はすなわち十生す。雜を修して至心ならざる者は、千の中に一も無し。〔選択集〕(浄土宗) 一一二頁。『往生礼讃』、『浄全』四卷三五七頁上。

(9) 本庄氏の出す例を一部ここに挙げておく。

法然『逆修説法』

【原文】但一世不二仏並出事(略) 大乘小乗俱不許二仏並出事。

【訳】ただし一つの世界に二人の仏が並存されるかどうかは「古来」大変な議論の対象となっています。(略) 大乘・小乗いずれにおいても二人の仏が並存されるということを確認していません。

法然『二期物語』

【原文】我今浄土宗を立てる意趣は(略) 若天台の教相によれば、凡夫往生をゆるすに似たりといへども(略) 惣て凡夫報土に生ずと云事をゆるさず。

【訳】私がいま浄土宗を立てる趣旨は(略) もし天台宗の教えによるならば、凡夫の往生を認めているようでもあるが(略) 総じて凡夫が報土に往生するということを認めない。

『瑜伽師地論』

【梵】 anujñāta 【訳】 承認された

【梵】 abhivyapagata 【訳】 承認された

【梵】 pratīhata 【訳】 許可された

【梵】 sammata 【訳】 「世間で広く」承認された

(10) 『法事讃』の誤ら。

(11) 『浄土宗聖典』一卷、二二七頁(第十八願)、二四九頁(第十八願の願成就文)。

(12) 『浄土宗聖典』一卷、三二二～三二三頁。

(13) 安達氏は同様に、『選択集』第二章の回向不回向対を「善導の文章を単純に解説しただけと考える」(安達 二〇〇一、一一八頁)としているが、これも本庄氏は同箇所を批判している。

(14) 本庄氏は「善導や法然が読んだであろう仏典」として『俱舍論』から二例を挙げているが、ここではそのうちの一例である第八章「定品」の無色界に物質(色)があるとする主張についての議論を挙げておく。

【問】もし色があるならどうして經典に「無色」とあるのか。【答】色が僅かしかないからである。例えば僅かに黄色があるのを「無黄」というごとくである。

(櫻部建・小谷信千代・本庄良文『俱舍論の原典研究 智品・定品』大蔵出版、二〇〇四年、二一六頁・玄奘訳、大正二九卷、一四五頁下「何故立無色名。由彼色微故。名無色。如微黄物亦名無黄」。真諦訳、同二九七頁上「若無色界有色、云何説為無色界。由色細故、譬如阿賓伽羅」。)

(15) 『選択集』(浄土宗) 一六四〜一六五頁。

(16) 平氏は、『醍醐本法然上人伝記』「三心料簡および御法語」所収の法語

余行ハシツヘケレトモセスト思ハ専修ノ心也 余行目出タケレトモ身ニカナハ子ハエセスト思ハ修セ子トモ雑行心也 云々(『昭法全』四五〇頁)

に着目し、法然の思想を「あくまで諸行に宗教的価値を認めない」と論じているが、この法語およびこれに類する法語は他の法然遺文に一切見られないものであり注意が必要である。そしてこの法語の場合、「雑修心」と規定される内容の方が「専修心」よりも、三学非器の説示や難易義の考え方によく合致するものであるといえる。

法然の回心に着目しながら諸行往生について考察し、法然は理論上諸行往生は認めていたと結論する論文として「結城 二〇〇三」を挙げるができる。

(17) 本庄氏(本庄 二〇一a)は、

私も、法然は諸行往生を完全否定の寸前に至るまで——可能性ゼロに近い程度にまで——大いに「否定」していると考えており、(略)私は単なる「否定」などという曖昧な表現を峻拒する、微妙なところを問題にしている

のであり、そのためにこそ乏しい知見を総動員したいのである。またある意味、法然の真骨頂はそのような微妙なところにこそあるとさえ考えている。
と論じているが、本稿はその「真骨頂」をこのように考えるものである。

参考論文一覧

安達俊英「法然浄土教における諸行往生の可否―『選択集』第二章・第十二章を中心に」、『仏教文化研究』四一号、一九九六年

――『『選択集』における諸行往生的表現の理解』、『法然浄土教の思想と伝歴―阿川文正教授古稀記念論集』、二〇〇一年

清水谷正尊「法然における諸行と念仏」、『法然と親鸞―その教義の継承と展開―』、永田文昌堂、二〇〇三年

善裕昭「法然上人における重要用語の検討―廢立―」、『佛教論叢』三五号、一九九一年

――『『選択本願念仏集』、『日本仏教の文献ガイド』、法蔵館 二〇〇一年

曾根宣雄「法然上人と諸行往生」、『佛教論叢』四五、二〇〇一年

平雅行「日本中世の社会と仏教」、塙書房、一九九二年

松本史朗「第一章 選択本願念仏説と悪人正因説―平雅行氏の所論をめぐって―」、『法然親鸞思想論』、大蔵出版、二〇〇一年

森新之介「法然房源空の二門判と二行判―その能否と難易、勝劣について―」、『宗教研究』八四(三)、二〇一〇年

本庄良文「経の文言と宗義―部派佛教から『選択集』へ」、『日本佛教学会年報』第七六号、二〇一〇年

――『『選択集』第四・第十二章における「廢立」の語義』、『八百年遠忌記念 法然上人研究論文集』、浄土宗学研

究所、二〇一一年 a

——『選択集』第十三章における「不可得生」の経典解釈法」、『浄土宗学研究』三七号、二〇一一年b

——『法然における諸行往生の「否定」——論点の整理——』、『法然上人八〇〇年大遠忌記念 法然仏教とその可能性』、法蔵館、二〇一二年a

——『選択集』第二章における千中無一説』、『仏教学部論集』通号九六、二〇一二年b

——『選択集』第六章における特留念仏釈と諸行往生の可否——平雅行説の検討——』、『福原隆善先生古稀記念論集 仏法僧論集』、山喜房仏書林、二〇一四年a

——『了慧道光による『選択集』第十三章「不可得生」の解釈』、『廣川堯敏教授古稀記念論集 浄土教と佛教』、山喜房佛書林、二〇一四年b

——『選択集』第十二章における随自意・随他意説——諸行往生の可能性に関する善裕昭説の検討——』、『法然仏教の諸相』、法蔵館、二〇一四年c

——『法然における諸行往生の可否——「ふつとむまれずといふにはあらず」——』、『印度學佛教學研究』六八(二)、二〇一〇年

結城文親「法然浄土教における念仏往生と諸行往生——『和語灯録』を中心に——』、『浄土學』第五四輯、二〇一七年 大正大学浄土学研究會編

キーワード 諸行往生、平雅行、本庄良文